

図る（1～2時限）。次いで衣生活自己診断ソフトで、自分の衣生活の問題点を認識させる。並行して、所持被服のデータベースを作成させる（3～4時限）。そして、データベースの検索・活用を通して、主体的に情報を活用する態度の育成と、既習事項の定着を図る（5～6時限：表IV-4参照）。この問題解決の過程において、タイプ別学習を取り入れ、それらタイプに応じた各種情報を提示することで、主体的な学習態度を促していく。そうすれば、生徒の実態に応じた被服計画が構想でき、今後の衣生活改善への意欲と実践の態度が身に付くものとする。

なお、コンピュータ利用形態は、二人で一台の使用となるため、個人情報の扱いには配慮する。

② 授業の状況

商業科3年の生徒はコンピュータの操作には、ある程度慣れており、積極的に取り組んでいた。

学習の展開時においては、問題追究のために検索を始めると、「エー?」「ウソー!」といった驚きや疑問の声があがり、新たな発見に目を輝かせる生徒の姿がみられた。一方では、検索で知り得た情報を十分に生かせなかった生徒もいた。

タイプ別では、Bタイプは黙々と取り組んでおり、Cタイプは質問したり、隣の生徒と話し合うなど活発で、対照的な学習態度であった。



↑ 授業風景 →

4. 結果と考察

(1) 事前・事後調査の結果と考察

事前・事後調査（12項目）を実施し、t検定により4タイプの変容をみた（表IV-5）。

表IV-5 t検定の結果

(◎有意差あり, 〰高めたい要素)

タイプ	学習意欲	情報活用能力	達成感・成就感
A	◎	〰	〰
B	〰	〰	
C	◎	〰	〰
D	〰	〰	

この結果から、次のことがいえる。

「学習意欲」は、すべてのタイプで高まっており、特にCタイプが顕著であった。

これは、ソフトウェアの適宜性（活用場面とその内容）が好ましい結果に結びついたものと考えられる。

「情報活用能力」は、A、C、Dタイプに高まりがみられた。

これは、データベースを課題解決の情報源として学習活動の中心に位置づけたことと、生徒自らデータを入力、整理、保存し、必要に応じて検索し活用する、といった一連の活動を通して高まっていったものと思われる。

「達成感・成就感」は、Cタイプ以外は変容があまりみられなかった。

タイプ別では、C、Dタイプは高めたい要素が伸び、効果がみられた。これは、基礎・基本が不足しているため、問題解決までの見通しが持てないような傾向を持つ生徒たちが、コンピュータから動機づけや解決のヒントを得たことで、学習意欲や情報活用能力が高まり、特に情意面が高いCタイプはそれらが相まって、分かることの楽しさ、学習への自信につながっていったものと思われる。

一方認知面の高いA、Bタイプは高めたい要素の一つである達成感・成就感（A）、情報活用能力（B）の伸びが小さい。学習意欲は高まったものの、内的な高まりまで啓発できなかったものとする。A、Bタイプには、さらに知的好奇心を高めるような課題の設定が必要と思われる。

(2) 抽出生徒の結果と考察

表IV-6は、各タイプ別の抽出生徒の事前・事後調査の結果と感想である。

生徒A子は、情報活用能力、達成感・成就感に高い伸びがみられた。データベースの入力件数200